【郷土史への扉】

こうあった薩摩義士の墓

平成三年五月二十五日付けの南日本新聞に、隼人町住吉の墓地に薩摩義士の墓があると報じられました。何で住吉に薩摩義士の墓があるの、と地元では驚いたものです。

「薩摩義士」というと、宝暦四年（一七五四年）から五年にかけて、尾張（愛知県）美濃（岐阜県）伊勢（三重県）にまたがる木曽・長良・揖斐川の河川改修に従った薩摩藩士に後世付けられた名称です。

工事の最中自殺した人や、病気で亡くなった人たちは、向こうに葬られていると聞いていたので、いっそう新聞報道は半信半疑でした。

住吉墓地の薩摩義士の名前は、山元八兵衛と書かれていました。そこで住吉墓地に行って調べてみると確かにそれがありました。さらに三重県桑名市の海蔵寺に山元八兵衛の墓が保存されていることも判りました。

その後、海蔵寺に出向き現地調査したところ、両者の戒名・没年ともに一致したのです。ただ海蔵寺の墓には山元八兵衛のほか「定矩」という刻字があり、拓本を採って持ち帰りました。

再び住吉の墓地を調査した結果、「山元八兵衛定矩母」という刻字のある墓も見付けました。これで住吉の墓も薩摩義士のものに間違いないとの結論に達しました。住吉の墓は遺骨の一部か遺髪を持ち帰り、埋めたものではないかと考えられています。

ここで一つ問題になるのが、山元八兵衛が住んでいた場所の問題です。木曽川の治水工事に従ったのは、鹿児島城下の武士たちです。ところが八兵衛は隼人町住吉に住んでいたと思われるのです。江戸時代、隼人町は国分郷に属していました。薩摩藩は城下のほか、地方には郷という区政を敷き、武士を住まわせました。郷に住む武士は、はじめ外城衆中、後に郷士と呼ばれ、江戸時代初めまでは、城下の武士と身分の差は無かったのですが、後には城下士より一段低いものとみなされるようになりました。

郷士である者がなぜ城下士に交じって治水工事に行ったのか、ここが大きなナゾなのです。それと八兵衛は勘定方（今の経理担当者のような仕事）をしていたと子孫は伝えております。

鹿児島市城山下に将棋の駒形を積み上げたような薩摩義士の顕彰碑があります。それをみると平田靱負の下から二段目正面に八兵衛の名前があります。顕彰碑は大正九年の建造ですが、順位を何によって付けたかは分かりません。しかし工事費のやり繰りをする役目だとすると、その地位は軽いものではなかったのではないでしょうか。

八兵衛は宝暦四年十一月二十五日に切腹して亡くなっています。切腹の原因はよく分かりませんが、工事費をめぐるトラブルか何かによって責任を負わされたことも考えられるところです。

八兵衛の子孫に文久二年の生麦事件でイギリス人を斬った久木村治休がいます。久木村も島津久光のお供に加わっています。その父山元勇右衛門も蛤御門の変で戦死しています。こうしたことをいろいろ考え合わせてみると、山元家は代々城下士と同じような身分の家柄であったのではないかと思われるのです。

残念ながら、その理由を突き止めることができません。まったくの憶測ですが、寛文二年（一六六二）の新川川筋直しの工事などで出張したまま先祖が住吉に住み着いた、こんなことも考えてみます。

水害に悩む木曽川周辺の人々を救ったことにより、後世の人々に義士と称えられた薩摩藩士の墓は、ほとんど木曽川流域の寺にあるのに、隼人町に実在する薩摩義士の墓は、まことに貴重であるといわねばなりません。

今年四月に霧島市薩摩義士顕彰会が発足しました。これは薩摩義士の業績を顕彰したいと願う人々が集まった有志の会です。

山元八兵衛の墓の存在が顕彰会の盛り上がりに一役かったことは有り難いことでした。今後は顕彰会でさらなる薩摩義士の研究調査活動が進むことを願うのみです。

（文責＝藤）

隼人町住吉の山元八兵衛の墓